



谷氏藏書

喪系の二禮。世のあつりしれまうてなほさ
の家禮のれもけいさう家よあつゆり
俗語ありあつ俗礼をまうて婦女児童れ
とまがらゆで是をよみ見てかたうその
みさよくなしてん少おまらじやうみと
まつく。終よいあつ巻とをりぬよりてあ
つまが二禮童覽とまんいぬあもつ成る

元 序

人のいづくかきりし法をうひし
家礼よよかむとて久しや我こそよ
づらく先かくはしめし備親をせむ
ろくは郷俗ももろくもど。つ
きみかきりす是し後よ又喪
あみゆあつたやう金くよく入れと
きし修む。初よりむとそ
家礼ははらうとむむのむし
かたりしといひ。久しき人さあ

いさりん。つて家禮か
よ又後。つておこあひ
しるものあつてはらうとむむ
とそ。もしく。つてはらうとむむ
はらうとむむ。つてはらうとむむ
よそやとの人。つてはらうとむむ
ぬ人よ。つてはらうとむむ
家禮儀節。つてはらうとむむ
つらみ。つてはらうとむむ

家礼
序

杜撰ありて罪を先賢よりうけ
あゝ

萬治三年七月日

二禮童覽上目錄

喪礼

初喪一

護喪主賓司書司貨二

備用三

治棺四

神主五

誌石六

沐浴七 附 襲

入棺八



發引九

治葬十

虞祭十一

墳墓十二

居喪十三

附 祥禫

奔喪十四

返葬十五

請親十六

君喪十七

二礼童覽上

喪礼

初喪一

をより人の父母病すたまふるありて死いつちりつて
 ひぬと刃やくはあげますまづれる衣類いをまよくはす
 りし小神よく父ある婦人をいするありをまて
 男子のあつらひらせ母ある婦人のちらく侍る
 命を遠くある書つく命を家内いうめれ物をある
 うめる心のこもつくすては息くて終つて後
 さいのめやおよぶ一家の男女られ哀れたるを奉じ



浴衣 二、ゆて二

慎目中

きんすくす四方の絹二をぬいあをせ。中へ綿入四の角
又むがつて死者の顔よあて。うろどくせしむぬをり。
絹の色表と黒く裏と赤くとあれも白キ絹をて
もするをさう

握手中

絹一を二をさけきんすく。中へ綿入ぬいあをせ。四の
角よの平はけ。おろくやうは二つうく死者のあを
とつむをり。きんすく絹の色慎目中も同じ

克身

綿をもちあめて死者の
あ身をふさぎをり

沐浴具

桶さうい
の類

墨

幕

白布あて

草衾

布みんぐ或ハ六くくけをむくうり
むくくのつくとおをり。用やう下は丸くうり

綿衾

草衾のつくある物二を。中へ綿入を丸くあてし
絹もつくあへ。用やう下は丸くうり

三物

石灰は砂と赤土とをぬき綿を三つまで水は酒を加て
あめ寸をり。石灰三石をぬき砂と赤土をぬき也。葬の時こ
せめて炭末と棺との間にしる厚さ
二寸をくり。つあやう下の治葬のあは記せ
おろく炭の粉をり。はうあを細末あしる
よ。三物とまとの同じしる地をり

炭末

沈香

死者のあをる膳具をり。きんすくをやく存生の神を
あをるし。はうあを初死のうま地は生時のあをるしを
用ゆるし礼記は又し。はうあを

本具土器

死者のあをる膳具をり。きんすくをやく存生の神を
あをるし。はうあを初死のうま地は生時のあをるしを
用ゆるし礼記は又し。はうあを

茅砂

盆は砂とをり。其上は茅を二枚をゆきを糸の時酒を
くゆをり。炭系より用ゆるしはうあを。葬具とむくく酒をり
喪を等し。竹のふを下。末をあふとる
やうはする。桐の本を用ゆるしあり

杖

右大略かくの。護喪司貸おとらりて遠く用

さする

治棺四 棺のこしやう也

くろりそく厚さ今の尺八寸の板板多く箱よこ守る。四のすこ板のこしめかといつても堅本れちりて用て釘をみさうしうるうらう。寸法いりの死者の身の長短よ小まきうひて定じし。大抵堅い死者の足なのての脚を横い肩のこし深さの死をあまのこりおさめてしう。程ありて頸のこしを高く廣く足のをひさくせざくす。や何方てもおやくらうらこのあたやうす。さうりれく又せえまれ。小神ありつじらふて。草食

食もちもあひやせぬく。よく吟味をなす。蓋を木のちこりを入れてまじらばりしうらう。本書より釘を用るし刃くこれと針は朽屋にまれへてせう。家礼におあぶ人おあやう太のこくす。おん底のこりまの鉄の深とじらてゆと。草繩とを不まてうををりてあつ。や棺のあひの作法のこす。こり又棺の作りや。例よこらひらりと西人あやう法のこくす。こりや。四角よよくこくして死者体内よ坐せし。やうはゆきす。す。長めてお外棺よす。おさう。こり棺のこら

儀（儀）あるは本もまきしく漆（漆）めてぬるるりともうしほを
老親（老親）ある人のかねてむらうる用とあるはこゝろを
を六十のほのかれら寸棺を作るをうけいひまう
さうといひておそある思（思）慮（慮）なりしるや、自（自）備（備）の葬具
をか福（福）てよりそのさこれとけううてうせうめ
うきよはゆふと物どえ何とあけりあをくふいの人
の行（行）へをうり○棺（棺）を介（介）は又棺の拾（拾）ぬ（ぬ）も又棺（棺）より
を内規（内規）の寸つつまうりへむらく上一（上）の七八寸たうて
蓋（蓋）のありて庶（庶）るあさ物紙（紙）うすさ板（板）めてさうせむを
し。あれと灰隔（灰隔）やす。さあされの三物やうめ。

用やう治葬（治葬）のあよくさう。三物（三物）の第一記（記）とバ（バ）う家
礼（礼）よりりて葬す人のむくを棺と二をりて其
るへ松脂（松脂）をさうかへ入（入）心をさうと次（次）をうせは温公
のいふふの擲（擲）と用（用）さふがうりしきや擲（擲）さくれの
松脂（松脂）を入（入）て身やうさうさうて灰隔（灰隔）つるふ灰隔
年（年）のうりたれの金石（金石）とふふとさう此洗（洗）めて凡（凡）れは三
物をさう用（用）ひさうの松脂（松脂）もさうさうさう松脂（松脂）と
用（用）さう上（上）の擲（擲）も勿（勿）漏（漏）さう用（用）さうり擲（擲）さすれら外棺
なり。さうさうかあるさ内外棺（内外棺）とさ此（此）松脂（松脂）三物
さうに用（用）ふをさうり温公（温公）乃外棺松脂（松脂）用（用）られさうさ

きり。よく吟味する。葬禮の時こそは一族の内より
 一人一人あつめて葬儀に参集せしむ。墓より出
 るよ。身より入るとは棺をかきしむ隙に横へるに
 出し。そのついでに人々の浄を硯水彩し。其業
 畢めて死者の浄名をまつ。喪より出たはあは焼香
 再拜し。神あれよとせまると信て。又横へ入るにせ。
 それより一か大度してをり。そのかゝるや。浄に
 浄名の家より懸して持来するをよかかん

誌石六

石は法ありあつて三四寸をうり。はてか長きある石あり

うらんとおいて。はたまた字の數より。かゝるやうに
 二つうらる。魚よりみかた死者の姓を。玉の外のり
 せ。たうく。かゝるやうに。ついでに。たを内へ。二
 の石より。あつて。二つをうり。鉄の輪と。たを
 葬の所と。また。塚の内へ。て。地面より。三寸。をうり。下
 玉を。まより。を。ひら。尾。あ。は。は。し。り。書。つ。き。ん
 家禮より。ひら。を。その。か。ま。し。り。の。碑。を。い。し。て
 ず。また。の。誌。石。を。刻。る。は。次。葬。の。所。を。出。来。せ。は。ハ
 か。さ。ね。て。塚。と。は。つ。ま。て。入。て。よ。せ。う。り。河。う。つ。つ。は。塚。の
 形。も。う。く。或。は。市。町。城。塚。と。あ。り。て。池。井。お。と。よ。り。う。り。さ

まゐり時。この名に於て其時の人を越えようとして死者の姓
の字をか移してより姓を置くる。さうして同姓同國同職
の人をとりあひてかゝる寸の感動して改めらるゝしる。或る
もはや然るに人の其親のくまよふに改めらるゝのうらみ。
はしり改めんとする。或る。

沐浴七 附 襲

沐浴ハ死者よゆあひせらるゝす。や襲ハ
襲束を穿ててせしむる也。

死者をあらうに其日の暮。既し死者あらうにあけの月沐浴
せしむら守る。うの湯は祓のあらめていさうとを
次。我を愛の内して清浄ある地。かりは竈にぬり
てけり。湯を座敷の内傍よりききとて暮

あてから死者を心やすくせらるゝにうらみくその内は
入て湯をあらひせらるゝす。まづまをたよくあらひ
よくぬらひ洗へ下を方とあらひぬらひぬりてゆき上下
よえて用る。喪主喪母はみまにあらひの死者ありて
哀を奉る。さて死者の髪及具よくまよめて既し
名を常のとき。前とせしむ。其間死者病中
乃衣衾としほりかきり新しき。さうして沐浴せらる
らうに。ききの上よ。平衣。上よ。死者と
うつ。小神式つめてし。三つめてし。何れよ。まよひて
せらるゝ。暑く。ちあらうか。ちあらう。暑く。何服
と。

瓜みくし入をくまそ綿糸はわらひ棺の内へてこ
 入所。其の糸はくまの糸のまうらも次は類乃か次は
 をちひひ次は石紙のやひ棺のちりりすうさる程
 みて蓋とさひし下。畢竟棺の内よりくまをさうしす。
 小神の敷小飲十九糸大飲三十糸とわれははちやく
 月ふさやぐの小神はちやくしれんくはとよりり
 らく燈る。あつひいあつせ。或はむとく備あつてうま
 綿のへる小神や喪大祀よの列糸よあつはまは入を
 とわれと。芥しと色よわつる。うまうまう。小神すくま
 へ又をれよさうして綿めても消めてもくつし。

貧家あつる小神あつらう。くまも死する存すのくま
 みて月い不足のあち布をめん紙まも用てまつい。色
 して棺のあつばちのちひの紙かけうら。又酒茶菓子
 ちとそ。其長と奉へて入棺の時刻の。四倍も。代
 とつうぐ。二重をこまぞ。うら。色。可も。公。れ。い。く
 禮は三月あつて。あつじ。つ。其。三。つ。い。さ。せ。ん。る。紙。ま。う
 そら。三月あつて。い。さ。せ。れ。い。い。い。ん。ほ。る。ま。う。う。ら。ぬ。ま。三
 月とあつて。そ。う。礼。と。を。り。と。あ。ん。そ。う。い。又。死。して。よ。み
 へ。か。つ。つ。る。決。して。あ。つ。世。の中。ま。り。う。せ。う。今。ま。て。あ
 つ。い。り。い。父母の身。の。あ。つ。い。た。う。ま。の。あ。つ。い。た。う。内。の。

御葬十 ふむりおこし

山林清浄の地とえてんあしつらう。早速みりしと
 めえくくむらう。寺院の内とかりてまづくおこえ
 地とえてあつそめ葬らんより後ひきし。御葬の儀式
ハヤ吉兵氏補
 入のしよをとりきく。ち院入内の墓地をく変ずし
福守會
 くの河いあつあまふう。勿論まうもみれ計の未
 の奥よりりりりおとりの葬儀うら次。悪獸盜賊のれ
 へあつあすでいさうまらうらう。親れくまう。こま
 ぞ人あつこよら盛服して其あよゆれ。墳ははる
 こ地。すう。右れこ。あつこ。おほやう。あつこ。あつこ。

係一づつあんで土地の神よりとをう。何ぐ。墓と
 地あよい。あまふ。ゆくまらふれやう。まらり。あつこ。あつこ。
 方といり。あつこ。あつこ。あつこ。あつこ。あつこ。あつこ。
 せつる。あつこ。あつこ。あつこ。あつこ。あつこ。あつこ。
 墓の穴あり。あつこ。あつこ。あつこ。あつこ。あつこ。あつこ。
 えり。あつこ。あつこ。あつこ。あつこ。あつこ。あつこ。
 又あつこ。あつこ。あつこ。あつこ。あつこ。あつこ。
 六ん。あつこ。あつこ。あつこ。あつこ。あつこ。あつこ。
 入る。あつこ。あつこ。あつこ。あつこ。あつこ。あつこ。
 の。あつこ。あつこ。あつこ。あつこ。あつこ。あつこ。

三禮 上
能み候とて。本とりののまきぶくろは底よいて
しめ。鏝くえんよつこし。所ところ繩なはとぬきこり。棺くわんと灰隔はいかく
の箱はこのちく三物さんぶつは入いれてゆかへむ。棺くわんの内うちへむり
ゆかへむ。棺くわんの蓋ふたの上うへは灰隔はいかくの箱はこのちく一ひとい
三物さんぶつをこむて能のつこり。灰隔はいかくのちくはくさ
みてまじへり。ちのちの上うへは又また炭末すすをこりこ
み六寸むすぶちむて。ちもより上うへを土つちをり。土つち式しきはあま
し。むりし。おり。河誌かじ石いしと入いれて。誌石しし前まへは
尺せきこり。棺くわん小首せうしゆよおさめ南なんとあとする。ち
能のよりて。ちくこり。方角かつかうははのちく。ち

ある人いよく葬地まうぢえりひてみ。縁えんは和わあり
といふ。其理そのりありや。ちいよく其理そのりあり。
おやま。我身われみの根ねをり。根ねよさ。土地ちどよおさゆ
りさめ。枝葉えだはくさる。ちあさ。ちえや。よさ。土
地ちどといえ。ちのち。清浄しやうじやうめて土つちのち。ちひり
く。地ち取とり。ちく。ちりて。水みづいで。草くさ木きこさく
ちをりて。ちく。五患ごくわんのち。ちひり。ちひり。ち
ちり。ち患くわんのち。ちひり。ちひり。ちひり。ちひり。ち
ち。海池うみいけとちり。貴人きじんよ。ちひり。ちひり。ちひり。ちひり。ち
とちり。田島えんじまとちり。ちひり。ちひり。ちひり。ちひり。ち

祭の初より前よをりつらつら^い虞祭^いその日れ月中
よ^いち^いち^いち^い。午の初い^いの葬^いれ^いあ^いる^い景^いに
て^い祭^い陰^いあ^いて^いと^いく^いと^い日^いの内^いよ^いま^いつ^いる^い。と^いく^い
祭^い少^いけて^い葬^いり^いつ^いら^いあ^いけ^いの日^いさ^いつ^いる^い。是^いを^い初^い虞^い
とい^いふ。^{三虞ありこま}初^い虞^いの日^いさ^いの^いえ^いひ^いの^いえ^いつ^いら^いの^いえ^い
か^いの^いえ^いつ^いら^いの^いえ^いあ^いる^い。其^いあ^いけ^いの日^い又^いま^いつ^いる^い。き^いの^いと^いい
の^いと^いつ^いら^いの^いと^いか^いの^いと^いら^いの^いと^いま^いじ^い日^いづ^いそ^いく^い又^いま^いつ^いる^い。是^い
を^い再^い虞^いとい^いふ。再^い虞^いの^いあ^いく^いる^い日^い又^いま^いつ^いる^い。是^いと^い三^い虞^い
とい^いふ。比^い次^いは^い卒^い哭^い入^い祭^いと^い云^いが^いあ^いれ^いと^いそれ^いは^い古^い法^い三^い
ヶ月^いあ^いつ^いて^い葬^いる^い時^いの日^いも^いず^いづ^いは^い三^い虞^いあ^いつ^いて^いや^いり^いて

それより又十日の内を毎日朝夕は膳とをまゐる。
夕^い夕^いの^い香^い燭^い茶^い菓^いん^いら^いに^いを^いす^いと^いす^い。初^い虞^い
も^いも^い死^いを^い平^い生^いり^いて^いあ^いそ^いひ^い多^いけ^いと^い神^い皇^いの^い所^い
あ^いま^いつ^いる^い。初^い虞^いの^い日^いも^いず^いづ^いは^い三^い虞^いあ^いつ^いて^いや^いり^いて
よ^いり^いか^いら^いく^い寸^い。初^い虞^いの^い日^いも^いず^いづ^いは^い三^い虞^いあ^いつ^いて^いや^いり^いて
奠^いの^い日^いも^いず^いづ^いは^い三^い虞^いあ^いつ^いて^いや^いり^いて
其^い内^い奠^いは^いん^いや^いく^い寸^い。奠^いの^い日^いも^いず^いづ^いは^い三^い虞^いあ^いつ^いて^いや^いり^いて
ぬ^い地^いを^いく^いり^いつ^いら^いぬ^いを^いも^いと^いあり^い。卒^い哭^いと^い云^いは^い大^いく^いと^い百^い日
よ^いら^いつ^いる^い。奠^いの^い日^いも^いず^いづ^いは^い三^い虞^いあ^いつ^いて^いや^いり^いて
日^いと^いその^い日^いは^い奠^い也^い。奠^いの^い日^いも^いず^いづ^いは^い三^い虞^いあ^いつ^いて^いや^いり^いて

視文をよむ人主人のたよあを角。そやうく
告れよおえじくのまこなり

墳墓十二 塚のつぎ やうやう

墳のかうらむじこあていんむ。南北へそく東西へ
いんぐく。南いそくむろく。北いぬくよいさくす
やく。上いせどく。下いむろく。そのや。前のいんこ
周尺の四尺。それより少の長さ。東西れひろさ。松
尺合次第ますす。寸尺分めあらず。よをせどく
する。人ののびくぬやうも。や下をひろくする。いん
けいさ。あやう。よとやか。はしく土めて。はさか。あ。

墳の下の前れ。中。石碑と。いふなり。それ碑
とけ周尺も。て四尺。も。を。人あ。なり。厚さ。さ。ら。三
か。二。なり。上と。あ。やう。ざ。が。ら。あ。て。その。面。の
死者の姓名とあ。う。これ。の。墓。と。い。は。れ。碑。の。元
の。揚。り。其。の。實。を。く。や。行。實。と。い。う。の。人。の。一
代。の。用。ま。せる。ま。ぎ。や。も。文。ま。く。碑。の。元。より。一。ろ
ま。つ。右。の。ま。こ。入。でも。ま。ま。う。も。角。碑。の。基。ま。た。は。じ
石。と。他。も。墳。の。ま。う。り。ま。か。ま。ま。い。て。墳。と。つ。つ。り
め。ら。う。一。碑。の。ま。う。り。角。と。や。れ。を。用。尺。す。る。や。う。ま。す
一。墳。の。木。の。末。線。と。う。し。ぬ。ま。を。こ。と。や。れ。は。と。ぬ

三つてう。周人の四人今の尺とてさ式又すみふ
餘う。祇家周尺あり。うつーむへー。法よまうへお不
やうかくのしくまきとも。國俗^{こくぞく}えむきかしく。墳碑
のかど地みまきいなるうす魚。うねとす法よら次
あふ人いとも^{ちよとらうい}初喪^{しよさう}の礼法をさくらに俗礼よ
さうていりごんに費用^{いよう}あかしく。まうーさ入るあて
せびつあうす家^か産^{さん}やあれまん。さいありとも
と先せんや。予いらく人の法よの田^{でん}法うり身
をうりて葬つしあしともあまの^{さい}賊^{さい}産^{さん}のうこ
まうるをいふとかなんぞ。さ礼やげいも仕^し官^{くわん}の

人うまといさういさうする魚さよあう^{れん}祇^しを^を我^が力
のうさうわはくしてあし下。是^{これ}聖^{せい}人^{じん}のさまは
家の有^{ゆう}益^{えき}よかあふや。そー力^{りき}はあうぬる魚^{いさな}は
とありて。うらうらむてせびつ悔^{くわい}ふ。さ罪^{つみ}
つらよあまをん。され^{これ}繫^{けい}辞^じよいさう^い大^{たい}過^{くわ}よ
ともい^い説^{せつ}さすい。孟子^{まうじ}もさ大^{たい}下^げのさあよ其^{その}親^{しん}よ
うすくせ^せ決^{けつ}とのさま^まは^はる^るう^うう^うい^いさ^さ家^かを^を。
せの異^い教^{きやう}の人のいんれぬ骨^{ほね}ありま^まい^いなる^{なる}よさ
まれてけが親^{しん}よあううらう^{うらう}のさあ^あは^は決^{けつ}聖^{せい}人の
大^{たい}礼^{らい}とまうす。大^{たい}罪^{ざい}よあうすや。よあふ人のいんく

宴罷舞座よりあつるやんとはくふるふるのうらみあり
 及つど。せし他用もて其不^レ行^レくやうとありきとす
 やうふ^{（さか）}退^{（る）}この^{（さか）}か^{（る）}。きく^{（さか）}ま^{（る）}君の^{（さか）}か^{（る）}せ^{（る）}の^{（さか）}か^{（る）}り。
 終^{（る）}や^{（る）}一^{（さか）}張^{（る）}ん^{（さか）}け^{（る）}酒^{（さか）}肉^{（さか）}を^{（さか）}え^{（る）}よ^{（さか）}と^{（さか）}あ^{（る）}き^{（さか）}ま^{（る）}う^{（さか）}れ^{（る）}一^{（さか）}片^{（さか）}
 い^{（さか）}か^{（る）}せ^{（る）}の^{（さか）}ま^{（る）}あ^{（る）}一^{（さか）}。大^{（さか）}丈^{（さか）}も^{（さか）}長^{（さか）}又^{（さか）}の^{（さか）}な^{（さか）}ま^{（る）}の^{（さか）}命^{（さか）}ま^{（る）}
 て^{（さか）}肉^{（さか）}を^{（さか）}食^{（さか）}す^{（さか）}る^{（さか）}ゆ^{（さか）}礼^{（さか）}儀^{（さか）}よ^{（さか）}か^{（る）}て^{（さか）}ら^{（さか）}ひ^{（さか）}よ^{（さか）}あ^{（る）}ま^{（る）}ひ^{（さか）}
 さ^{（さか）}ら^{（さか）}り^{（さか）}喪^{（さか）}ふ^{（さか）}り^{（さか）}○男^{（さか）}女^{（さか）}色^{（さか）}の^{（さか）}三^{（さか）}年^{（さか）}の^{（さか）}あ^{（る）}つ^{（さか）}て^{（さか）}氷^{（さか）}火^{（さか）}を^{（さか）}さ^{（さか）}ら^{（さか）}
 う^{（さか）}と^{（さか）}く^{（さか）}す^{（さか）}一^{（さか）}。母^{（さか）}を^{（さか）}見^{（さか）}ず^{（さか）}い^{（さか）}妻^{（さか）}よ^{（さか）}ん^{（さか）}ほ^{（さか）}ら^{（さか）}む^{（さか）}ゆ^{（さか）}あ^{（る）}て^{（さか）}き^{（さか）}
 内^{（さか）}池^{（さか）}へ^{（さか）}入^{（さか）}り^{（さか）}さ^{（さか）}ら^{（さか）}む^{（さか）}お^{（さか）}つ^{（さか）}り^{（さか）}さ^{（さか）}ら^{（さか）}す^{（さか）}や^{（さか）}ら^{（さか）}出^{（さか）}一^{（さか）}。す
 こ^{（さか）}の^{（さか）}ち^{（さか）}も^{（さか）}さ^{（さか）}ら^{（さか）}ふ^{（さか）}へ^{（さか）}く^{（さか）}さ^{（さか）}ら^{（さか）}ぶ^{（さか）}て^{（さか）}女^{（さか）}の^{（さか）}す^{（さか）}く^{（さか）}い^{（さか）}か^{（さか）}ん^{（さか）}へ^{（さか）}

く^{（さか）}す^{（さか）}た^{（さか）}を^{（さか）}を^{（さか）}突^{（さか）}け^{（さか）}ら^{（さか）}け^{（さか）}た^{（さか）}の^{（さか）}わ^{（さか）}く^{（さか）}同^{（さか）}よ^{（さか）}か^{（さか）}ん^{（さか）}身^{（さか）}よ^{（さか）}入^{（さか）}
 と^{（さか）}て^{（さか）}も^{（さか）}ら^{（さか）}よ^{（さか）}か^{（さか）}ん^{（さか）}さ^{（さか）}く^{（さか）}は^{（さか）}一^{（さか）}こ^{（さか）}と^{（さか）}お^{（さか）}そ^{（さか）}の^{（さか）}い^{（さか）}か^{（さか）}ん^{（さか）}さ^{（さか）}く^{（さか）}を^{（さか）}せ^{（さか）}ぬ^{（さか）}也^{（さか）}
 人の^{（さか）}男^{（さか）}女^{（さか）}の^{（さか）}お^{（さか）}く^{（さか）}ら^{（さか）}り^{（さか）}す^{（さか）}ら^{（さか）}け^{（さか）}ら^{（さか）}を^{（さか）}え^{（さか）}さ^{（さか）}ら^{（さか）}け^{（さか）}た^{（さか）}。あ^{（さか）}ら^{（さか）}に
 ゆ^{（さか）}ら^{（さか）}せ^{（さか）}め^{（さか）}て^{（さか）}え^{（さか）}一^{（さか）}い^{（さか）}さ^{（さか）}ら^{（さか）}も^{（さか）}怨^{（さか）}念^{（さか）}う^{（さか）}い^{（さか）}さ^{（さか）}ら^{（さか）}け^{（さか）}た^{（さか）}い^{（さか）}れ^{（さか）}
 さ^{（さか）}ら^{（さか）}と^{（さか）}と^{（さか）}て^{（さか）}心^{（さか）}喪^{（さか）}い^{（さか）}や^{（さか）}ら^{（さか）}ま^{（さか）}ん^{（さか）}ゆ^{（さか）}り^{（さか）}く^{（さか）}お^{（さか）}そ^{（さか）}も^{（さか）}は^{（さか）}け^{（さか）}一^{（さか）}い^{（さか）}じ^{（さか）}は^{（さか）}
 ○^{（さか）}若^{（さか）}石^{（さか）}の^{（さか）}ゆ^{（さか）}ら^{（さか）}あ^{（さか）}ら^{（さか）}表^{（さか）}じ^{（さか）}こ^{（さか）}め^{（さか）}て^{（さか）}お^{（さか）}そ^{（さか）}の^{（さか）}う^{（さか）}ら^{（さか）}あ^{（さか）}ら^{（さか）}
 同^{（さか）}と^{（さか）}い^{（さか）}よ^{（さか）}も^{（さか）}お^{（さか）}ろ^{（さか）}う^{（さか）}ら^{（さか）}よ^{（さか）}ま^{（さか）}つ^{（さか）}ら^{（さか）}い^{（さか）}調^{（さか）}度^{（さか）}を^{（さか）}と^{（さか）}を^{（さか）}く^{（さか）}て^{（さか）}ら^{（さか）}
 り^{（さか）}ぬ^{（さか）}お^{（さか）}の^{（さか）}こ^{（さか）}も^{（さか）}て^{（さか）}す^{（さか）}こ^{（さか）}う^{（さか）}て^{（さか）}其^{（さか）}座^{（さか）}を^{（さか）}か^{（さか）}ら^{（さか）}け^{（さか）}ら^{（さか）}ま^{（さか）}く^{（さか）}座^{（さか）}を^{（さか）}
 も^{（さか）}ま^{（さか）}く^{（さか）}い^{（さか）}ら^{（さか）}う^{（さか）}ら^{（さか）}う^{（さか）}ら^{（さか）}して^{（さか）}三^{（さか）}年^{（さか）}の^{（さか）}ち^{（さか）}の^{（さか）}若^{（さか）}石^{（さか）}と^{（さか）}定^{（さか）}じ^{（さか）}一^{（さか）}。
 是^{（さか）}と^{（さか）}喪^{（さか）}次^{（さか）}の^{（さか）}ゆ^{（さか）}ら^{（さか）}あ^{（さか）}ら^{（さか）}と^{（さか）}坐^{（さか）}せ^{（さか）}ら^{（さか）}れ^{（さか）}ゆ^{（さか）}あ^{（さか）}れ^{（さか）}の^{（さか）}大^{（さか）}く^{（さか）}は^{（さか）}喪^{（さか）}次^{（さか）}

よむりありありてあそそまりぬ人本りてこの喪次
 介めて封固し人の心にくるまふのよひ答て我方より
 きはかやうとて出さぬ人よ余頼するともて
 すこし打あひてはさしよとひつて笑つては
 さそ尚朔ふその心くちんよとめえんれぬあは
 物くありて喪次のかよま滞すうらとていり
 てさういひたうくくくめえぬ書みとありの
 喪よめて書とよむゆさまといぬと聖経賢傳の
 かさよましとてさういひぬ人いづいこのま
 ろしぬ草子ふみかきそめいしぬはさる

す喪次はさしとていぬ○又十日すはてまるとは
 とめゆまづとつとつ用みとて人のえと行ぬ
 次月みくて人よまゆゆぬは中はれとてい
 ろよまゆ一病よいま用とありはよ入湯あが
 るゆはは様のとく切に口は身は瘡あうとてい
 よとありの○喪服のゆ枝 胡めてさみわぬ衣と
 ひと今ささる人まねやまて喪麻は入るゆえ
 むいせさしお礼おこみ人これと知衣すとてい
 恙するゆぬかへてあうとて布は袴肩衣
 人をりみとてい人の同よまははやうとて帯

禫^ハて^テ食^スす^ル大^ニ祥^ノの月^に内^には禫^シて^おつる^は檀^ヲ
 乾^肉を食^スす^ル大^ニ祥^ノの月^に内^には禫^シて^おつる^は檀^ヲ
 の^後を^り。い^はれ^ば也^も明^文あ^らる^るま^は檀^シて^おつる^は檀^ヲ
 云^ふ。檀^シて^おつる^は檀^ヲ。檀^シて^おつる^は檀^ヲ。檀^シて^おつる^は檀^ヲ。
 案^スす^るは^は父^ノを^りて^母の^をり^て期^ノの^喪す^る人^ノを^り
 寸^月と^りて^禫を^り。三^年の^喪す^る人^ノを^り
 月^ノの^喪す^る人^ノを^り。義^ヲを^りて^禫を^り。
 期^ノの^喪す^る人^ノを^り。三^年の^喪す^る人^ノを^り
 月^ノの^喪す^る人^ノを^り。義^ヲを^りて^禫を^り。
 期^ノの^喪す^る人^ノを^り。三^年の^喪す^る人^ノを^り
 月^ノの^喪す^る人^ノを^り。義^ヲを^りて^禫を^り。
 期^ノの^喪す^る人^ノを^り。三^年の^喪す^る人^ノを^り
 月^ノの^喪す^る人^ノを^り。義^ヲを^りて^禫を^り。

う^こめ^て精^をお^いへ^と也^{。大}祥^めり^て精^をお^いへ^と
 人^ノ。禫^ノの^祭の^日又^ニ三^日斎^戒す^る
 あ^らる^人は^人を^りて^禫を^り。三^年の^喪す^る人^ノを^り
 世^よう^らし^くと^りて^禫を^り。三^年の^喪す^る人^ノを^り
 禫^ノの^祭の^日又^ニ三^日斎^戒す^る
 の^日の^喪す^る人^ノを^り。三^年の^喪す^る人^ノを^り
 う^こめ^て精^をお^いへ^と也^{。大}祥^めり^て精^をお^いへ^と
 人^ノ。禫^ノの^祭の^日又^ニ三^日斎^戒す^る
 あ^らる^人は^人を^りて^禫を^り。三^年の^喪す^る人^ノを^り
 世^よう^らし^くと^りて^禫を^り。三^年の^喪す^る人^ノを^り
 禫^ノの^祭の^日又^ニ三^日斎^戒す^る
 の^日の^喪す^る人^ノを^り。三^年の^喪す^る人^ノを^り
 う^こめ^て精^をお^いへ^と也^{。大}祥^めり^て精^をお^いへ^と
 人^ノ。禫^ノの^祭の^日又^ニ三^日斎^戒す^る
 あ^らる^人は^人を^りて^禫を^り。三^年の^喪す^る人^ノを^り
 世^よう^らし^くと^りて^禫を^り。三^年の^喪す^る人^ノを^り
 禫^ノの^祭の^日又^ニ三^日斎^戒す^る
 の^日の^喪す^る人^ノを^り。三^年の^喪す^る人^ノを^り
 う^こめ^て精^をお^いへ^と也^{。大}祥^めり^て精^をお^いへ^と
 人^ノ。禫^ノの^祭の^日又^ニ三^日斎^戒す^る
 あ^らる^人は^人を^りて^禫を^り。三^年の^喪す^る人^ノを^り
 世^よう^らし^くと^りて^禫を^り。三^年の^喪す^る人^ノを^り
 禫^ノの^祭の^日又^ニ三^日斎^戒す^る
 の^日の^喪す^る人^ノを^り。三^年の^喪す^る人^ノを^り

予といふ。是又志う所へうすきと其死去のあよ目を
 負てたまふまに志うして。こそそを布發是こ
 こ前日の香燭茶菓酒膳とうまて明日何河な
 一沸供や下とつむそまつの。其河いりて棺を出
 主人の棺のたよ打うの後歩もて一里をりて
 それよりこも興ものここ也胡夕奠ともりく
 然こやとここのそねおなすていをつこころい後日
 の何河より有り判悪ある魚と一族のことつむ
 やる一族あこゝあより一二里のちよ出て小屋どの
 う民家けりて棺をのりもきつてこもて香燭茶菓

とうまのあつ津津。それよりまぬよ入らつて
 たり其やぬそへ賊中よわらて棺をこるよ懐け
 うのまゝ其侍うまてるあよとめ葬具よくいと
 て也よ葬地へ送まつす。俗法よ旅棺といひ
 必ずつ塩酒を用ひて死者の身といへて大塚
 かせく。こころ沐浴龍衣飲して棺の肉を
 清潔河にしるるあを。魚鳥の肉をこころ
 しくめて。其よこころんはれよぬのんや。おそよ
 のんぐめ。死罪のもの首をたを方つつととて
 うらうらよあつひてあつ。こころぬいぬて

主棺をりくも衣服をくしての沐浴おこさるこ
うあつぬるぬるはひく物のまゝにて葬埋すし
刃くころ。又さいく光ゆく人道路どうろをよりより
とて火よ屋やをてのりくる骨ほねすくくより
死よりてもて油あぶらよく志くめねとれとるも
あり。誠まことよりまことあつぬるや。司馬しごのいづく油
葬るるのあつぬるのまゝ其あよ葬つてよし
是とやくは海うみくくらんと人ふれあれはれや

諸親十六

おぢらまぬ おぢらまぬ おぢら 兄弟あひり

妻 子 宗領むねりやうより おいぬい 孫

あとおつる母

以上十三ヶ月の服かむをり。三月よりて葬つて酒
とのこ肉にく食すとあられ。葬まひ又十日。或ハ七八
十日よりん

いとこ

九ヶ月の服かむをり。精せいをすあよ一
ひおぢら 母おぢら おぢら 兄弟の妻
姉妹のみ へねうりれ兄弟 さいとこ いとこお
おいすこ 母くぢおぢらまぬ 母くぢおぢらまぬ

以上五ヶ月の服をり。終を三日

三ヶ月 母を弔ふに 終を三日 終

ひこのこ ヨウシヤメ めのと 友がら

以上三ヶ月の服をり。終を三日

婦人への妻の終をり

三年をり。終をり。父母の喪に

おさぬくて死する人の妻

その年よきつひて一等をささむ。八歳よりすまで

り死するは、陽とらふ。二十よりすまで死する

と申陽といぬ。十六より十九まで死するは長陽

と云ふ。この期の喪す。親類もて其死者を陽をさ

八ヶ月の服をり。申陽をさす。七月。下陽をさす。八月

八歳よ及ぶ。終は十三日。八ヶ月の服をり。妻といひる

男子よあつり。女よあつり。十九よりすまで

陽といす。終をり。終

右に依親の妻への大際と記を。妻細い家礼分四を

りかんとり。終をり。申陽神祇服紀念よす。終をり。終

きにさす。終をり。終をり。終をり。終をり。終をり。終

かつらばも服紀念ひらり。終をり。終をり。終をり。終

神祇服紀念

父母服十三ヶ月 服五十日

親父母服百五十日 服三十日

嫡母继母服三十日 服十日

史服十三ヶ月 服三十日

妻服九十日 服二十日

舅姑舅の服九十日 服二十日

嫡子服九十日 服二十日

末子服三十日 服十日

祖父母服百五十日 服三十日

伯父叔父服九十日 服二十日

姑父の服同前

兄弟兄弟の服九十日 服二十日

姊妹服同前

曾祖父母服九十日 服二十日

祖父母服三十日 服十日

嫡孫服三十日 服十日

末孫服七日 服三日

從兄弟父の服同前 无服

甥姪服同前 无服

異父兄弟兄弟の姊妹服三十日 服十日

同居あり
これに服す

外祖父母服九十日服二十日

留喪服三十日服十日

七歳以下去服

己上

君喪十七

此喪礼家礼このさうじのりと云々いはれしと云々いと判さだして禄しよをうらり
者心しんよかくくまううと云々いはれしと云々いと判さだして禄しよをうらり
みむみめてめんんははいいふふと云々いはれしと云々いと判さだして禄しよをうらり
較さををししと云々いはれしと云々いと判さだして禄しよをうらり
と云々いはれしと云々いと判さだして禄しよをうらり

ひまひままと云々いはれしと云々いと判さだして禄しよをうらり
ののささ下げ内ない外がい親せ疎そよよりりててと云々いはれしと云々いと判さだして禄しよをうらり
ああるる人にんいいと云々いはれしと云々いと判さだして禄しよをうらり
わわてて長ちやう短たんすすと云々いはれしと云々いと判さだして禄しよをうらり
親せ疎そと云々いはれしと云々いと判さだして禄しよをうらり
父ふ一いつ理りををりりと云々いはれしと云々いと判さだして禄しよをうらり
ををと云々いはれしと云々いと判さだして禄しよをうらり
と師しと云々いはれしと云々いと判さだして禄しよをうらり
おおわわてて情じやうのの厚こう薄はくのの大だい小せうををりりと云々いはれしと云々いと判さだして禄しよをうらり
と云々いはれしと云々いと判さだして禄しよをうらり

王長よあしすといぬりなくして城外の民を
服する所の喪は諸達官の長杖の杖の杖の下
ものささくははきこむあをせりて一長短せず
ハある處を寸

二禮童覽上終

二禮童覽下目録

糸禮

卜目一

齋戒二

備物三

陳器四

用人五

具膳六

儀節七

衾食八



忌日九

墓祭十

庚子十一

通禮十二

二禮童覽下

祭禮

ト目 ちんていしご月と
うらみなり

三年に喪おつりて後。毎年正月祭まじりおこ

みふ祭を四祭といふ。先祖の神主をあれは。

祠堂よあぐめりしるかいつきもおみーやう

よあふかをり。祭の月。二月。八月。十一月也。

月れさしめやう。前の居喪の用よるせは禮の

祭れト法のしこして申旬きてうらみの中旬

のトよ一俯一仰をえとる。をさやううらみずて



下旬の幾日と定じし。又、（？）法を用ひし二月
又月八月十一月の中と目て祭儀をしよう。其時を
前月下旬乃らぐり祠堂（？）は焼香（？）再沐
して本月吉日は祭つてまらんと告下（？）。
されとを公の人さ心よ悔をぬさつりし出来
ゆきのあましの前月よりゆりさずして抱いよむ
ふ日ありてつぎやうまらふはしりし頃

斎戒二 祭のあめ
よめいせ

祭より三日より前三日三夜はさつりし頃
あつての家を出し居るを掃除し力をさ

よめ衣服をうかよひの五孝と酒とを禁し
或ハ酒を止めよ 歌曲をさくど人の病をさくど
礼をさくどあり 喪とさくどすなてよろいの穢よめさる
あつりハ散斎といひておの抱いよめ安利益
一切の妄想妄念をさくど怒らよめ花つとんの
内いよめさくどつてうの親平生れはる
ごもれもいつを恩徳の報しよめさくどせく。
あつりハ致斎といひて内の抱いよめり内お熱
してすうもみよめさくど斎戒といよめり。
又湛然（？）純（？）一（？）と斎といよめ清然（？）教（？）場と進（？）

二礼 下

ぬとれをくささる也。是を信ひて平いしく天下
の物につくして供養をせむ。うの人のこころ
致さく其神つうせむ。ゆつどく致せし業
をじすひてそまを納む。納む。人
鬼一理をり人をとてさうじゆ。たゆい
入らふ人のこころをてかろ。と。衆をよめる
と。よ。こころをて。善也。と。り。さ。れ。し。る
といつ。我らより。く。な。る。致。を。て。忠。信。養
と。う。は。益。あ。る。一。前。戒。す。ま。り。ら。致。を。り。
又。は。け。の。ぞ。よ。え。し。る。ゆ。あ。り。せ。に。信。者。と

い。ん。と。く。人。何。を。信。ず。る。と。い。ふ。ま。は。は。ら。社。か
この。堂。よ。ら。う。ま。ふ。て。使。を。と。そ。お。や。く。れ。業
我。を。さ。け。ま。り。の。名。利。子。孫。の。業。花。を。い
の。よ。い。の。い。と。ゆ。み。く。祖。考。の。神。よ。い。と。い。め。て
う。と。い。く。を。り。たり。あ。れ。又。人。鬼。一。理。より。い
る。存。生。の。父。母。を。一。あ。る。人。の。父。母。の。飢。を
を。い。と。つ。て。河。の。權。あ。る。人。く。よ。あ。い。く。地。を。さ
との。う。の。富。貴。と。り。と。じ。つ。う。と。し。其。に。り
あ。う。く。人。を。一。ら。あ。る。を。よ。く。し。か。ん。だ
らん。や。人。を。た。ま。う。と。い。ふ。と。は。神。を。い。て

米糠よりぞく。不孝の心をいふし。うまひん
き。能くし。祀考の神よりつ。其餘力をりつて
外神をりや。祀らむ。法神は。同より
ね。祀らむ。必し。き。り。ね。ん。び。く。西の京より人
ある神社よ。い。め。る。り。ありて。七日。こ。り。り。多
其。第。七。日。父の忌日なり。あ。り。り。多。れ。ど。今。一。日。元
は。と。や。ゆ。ぞ。い。り。敷。乃。後。よ。老。翁。未。ア。て
み。ん。ぢ。今。日。地。を。う。ま。ふ。屋。さ。方。い。う。ま。い。ど
て。我。前。よ。を。り。あ。る。後。よ。地。を。ま。つ。り。毒。也。し
そ。り。て。く。し。い。よ。い。ど。い。か。め。て。み。ん。ぢ。が
祀。る。り。地。り。ま。い。ん。と。い。つ。る。し。か。ん。て。後。う。ら
け。さ。い。ま。く。く。ゆ。て。父。を。さ。り。つ。り。い。ま。も。る。と
あ。ん。あ。り。が。い。さ。神。勅。よ。う。う

備物三

糸よ。ま。ま。ふ。一。さ。地。を
り。く。あ。り。じ。り。を。り

糸の目ちつ。つ。く。ま。さ。く。い。て。用。意。由。り。す。毎
つ。次。つ。つ。器。物。を。吟。味。し。て。不。足。の。地。を。い
う。ら。く。さ。く。又。い。ん。あ。も。う。り。不。足。あ。る。常。の
器。を。よ。く。さ。よ。め。て。ま。じ。つ。つ。も。く。い。く。つ。つ
可。さ。く。魚。鳥。も。く。も。葉。葉。も。く。も。あ。り。て。の
地。内。の。く。の。地。は。も。神。に。存。生。よ。この

のひり物多かれもいふてりしる。和歌
 系葉酒漿いづきとさくめて、せいり穂切系よすし
 胎部大抵其神代存生乃いともふぬ日をも餐
 意ちう中つるさぬよとら重きのふし。はま
 家禮よふるといついてさくとの人の足とも
 せぬ美をうらうらぐ地を耕理し。耕を
 立てつる寸の玄用なり。て七よつうぬるら
 ぬよつうあることくすぬ。さるぬよつうその
 もれ常のそ客招待代何のとも用言し。
 酒飯系葉をすししり次第も不書の儀節

といかひるく寸用言すしり地大際たの

卓 仲まといは卓を用
又長卓を用てより

香案 香炉香合
香く

茅砂 神主毎座の御前并は香案にあ
をくくくくやうありしる

燭基

祝板 祝文をい板よくつうせ
とけをえくくせ

屏風

水具

椀 浅き深き
いろく

薄臺 平膳二三各同
くくくあり

そろへ玉一。祭器を... 主婦乃役なり。
 鍋釜の類を下... 入毎に物
 として一物とい... 用之を
 用之を... 主人の... 執事といふ
 主人の... 執事といふ... 主人の... 執事といふ

う神... 主人の... 主婦... 主人の... 主婦... 主人の... 主婦...

つゝいふあり儀節前はするもとあれども
 一主人とてさしとて礼はさう一人の儀
 具饌六供物のま
 法物とて法潔をつとむ身。膳物何をもて
 あらざるべきよあはれと。とめておぬすべし
 一。数おこなわれ自然に法潔きも。中膳は
 飯羹三種。二三の膳は一羹二種なり。飯一さ
 平も初は膳は七種。二は又種。三は三種を
 一。京もああるまもたつて其非をさ
 て。三四年来ありしあはれ。おとさす可いあり。蓋

焼の油ひさるやうすす。又物の味うこぬ
 やと多れ。糺すより起てまの世とあり。神あ
 たりぬ内は毛頭と人々のお儀食すうら
 一。猶大虫鼠の。めにうらさゆ。く磨あく
 うめく。何され入うらす。やうあ。きあ網
 一。國君もつう刀をとりて肉をさうら
 り。系統は刀くはまの士。庶人あ。の祭具も
 を考せさ。は。大なる悔意をり。それと身心
 とあ。うら。は。の。み。す。て。は。ま。き。あ。ら。ま
 又不致い。り。祭す。一。新。的。を。一。何。か。い。を。さ。く

とも丑の刻をうりよ起て、水水一仕仕束すへし仕
 官の男いい束のていさつりおろさおろさい寅のあ
 けより祭つとらじむ。うか身けけそあある
 ありよりてきえんえんありそいあつくうう素膳えんえんすは

儀節七

まつりごとまつりごとしるしるまつりまつり

大てい十八節あり。出主えんえん祭神。降神。進饌えんえんけけ食。
 初献えんえんけけ。饋祝えんえん。垂献えんえん。終献えんえん。盛門えんえん。啓門えんえん。飲福えんえん。受酢えんえん。徹饌えんえん。
 辞神えんえん。焚祝えんえん。納主えんえん。あれ也。うか下は位を。主人主婦
 中ら祠堂よまつり神主紙えんえん横より出へりし也。
 正寝の卓のたよりうつてむして中へり。考主えんえん。主

人ともいふなり。此主えんえん主婦よりよりてうつし也。
 横より出へりしなり。卓の上よむしてすもつ
 あり。おそれつてこの大事よりをそへるあり。う
 へり。考のさこゆか。およあてみとするを大
 なる不致なり。是と出主とす。さて神あり出て香
 案えんえん。前より主人主婦諸子えんえん。れくえんえん。四拜
 してよりぞく。是を祭神とす。次は執る。二人は
 酒注えんえんとえんえん。すへり。盛と紙えんえん。とえんえん。
 やす。さて香案えんえん。乃あり。えん。とえんえん。もろ。香を
 たりておやく。香炉より。たより。盛とえんえん。

右より酒注をさう。一盃くみて酒注を左の執
事よりうへへくみて酒注を右の執事の上よりあらせ
がし。盃を左の執事よりくみて。すくみてさうりて
て再拜也。是を降神とす。次は酒膳をさうりて
ハ主人。二ハ主婦。三ハ執事すす中へく。 みあるは長みよ
まへへい 是
を進饌とす。沸膳これよりて後主婦すこ
飯器汁器等乃婦くさうり箸俵飯の正中より
ておけてさうりて。是を備食とす。次は盃ます
くは盃は神主毎座の正面よりさうりて。主人すこく
は考主の沸さうりて一盃くみてさうりて酒注を
砂れ上よりさうりて。沸ありとい盃ます人をは
一拜也。此主の沸前よりかくりて。是を初
献とす。此祝を祈りたる方よりむて祝文より
し。是は禱祝なり。 よふおりにて其祝文と
香集の上香炉の元は 是神前
の盃をおろし。中より酒を扱よとて。其盃よ
又一杯くむ。茅砂の上よりかきおろし。おろしといは
其盃ます人退て一拜也。此主の沸ありておろし。是
を盃献とす。 酒と茅よりさうりての
くく人を神よかりてさうりての義と
思ふなり 是は
二不さうりてさうりて。是は
して神前より。又その酒を
扱よとて

右より酒注をさう。一盃くみて酒注を左の執
事よりうへへくみて酒注を右の執事の上よりあらせ
がし。盃を左の執事よりくみて。すくみてさうりて
て再拜也。是を降神とす。次は酒膳をさうりて
ハ主人。二ハ主婦。三ハ執事すす中へく。 みあるは長みよ
まへへい 是
を進饌とす。沸膳これよりて後主婦すこ
飯器汁器等乃婦くさうり箸俵飯の正中より
ておけてさうりて。是を備食とす。次は盃ます
くは盃は神主毎座の正面よりさうりて。主人すこく
は考主の沸さうりて一盃くみてさうりて酒注を
砂れ上よりさうりて。沸ありとい盃ます人をは
一拜也。此主の沸前よりかくりて。是を初
献とす。此祝を祈りたる方よりむて祝文より
し。是は禱祝なり。 よふおりにて其祝文と
香集の上香炉の元は 是神前
の盃をおろし。中より酒を扱よとて。其盃よ
又一杯くむ。茅砂の上よりかきおろし。おろしといは
其盃ます人退て一拜也。此主の沸ありておろし。是
を盃献とす。 酒と茅よりさうりての
くく人を神よかりてさうりての義と
思ふなり 是は
二不さうりてさうりて。是は
して神前より。又その酒を
扱よとて

一盞をい臺の上へ置く。或は主母す
 一盞一拜も。或は終軌をり。終軌の酒をい臺
 へ置く。すうくにておいて退出し。神前よ
 へ屏風をむく。戸をくろふ。是を圍つと寸。主
 人主母法ふ批率のつぎと次の間はありて。一飯
 を食す。あやふのあつて休息する也。その後戸の外
 までいれておとふ。戸をひらく。是と整へ寸。
 香案の前までおいて。まづ神前乃酒をお
 ろして其酒をおよとらさ。中一在れ神前の盞
 取らりて謹て以戴し。神酒すうく。其を
 是を飲福と寸。又神前の箸を飯よりぬき。

飲すうくと。以戴して是と食を。れ
 を受酢と寸。さて清膳とあむく。もちらの代類を
 そふ。次よここ茶。次、何れも其討のくさる。め
 次よ麩類。次、りうす。茶。かぶ。おも。主人。主母
 子。中り。つとく。持て。ま。い。り。て。ど。り。う。く。さ。れ。ふ。一。其。お
 ち。く。を。す。ぶ。ら。へ。は。是。を。徹。膳。と。寸。あ。く。ま。い。り
 て。主人。以下。衣。裳。引。つ。ら。う。い。て。う。づ。く。神。お。へ
 いて。四。物。と。是。を。禊。神。と。寸。其。い。と。月。が。い。や。さ。也
 祝文を香案の前まで火よやく。是を焚祝と寸。

神主は祠祠堂より入る。これ納主なり。その
 ち祭より入る。そのち祭より入る。その
 皆は社の堂よりうつらうつらして、
 ちやどひあまののこあまして一粒一滴をこち
 して、そのいふ敬なり。祭堂をいよくきよめて納め。
 料即ち抄くする酒肴野菜等のようさうあま
 へ。祭より出あつてさう親親朋友のものと送つては
 右に大さくけり。さうにのちの家よりあつては
 やかある人の足がとのりあつていふをさうさうさうさう
 又いかりて食ひしと家あつては右の内をさうさうさうさう

一。病人あつては礼ねとすくまふ志わすくまふ
 ぬかどりたこまきあり。聖人の人よりあつてぬかどり
 あり。さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 附食ハおらむぐしん中いとこさか法親の
 子孫をさうさうさうさうさうさう
 附食ハ祖考の神を正位として是よりつきて
 祭の義なり。正位南向あり。附の神主の西
 向して正位の東よりそ。正位東向あり。附位
 をいふ向よりす。又男の左より女は右よりあり
 又その西より東よりあり。附位は西
 向いておいて正位の東よりつきてあり。ぬかどり

かくへ云なり。其禮ハ正位の清膳よりおつり
て後子亦こ余あしく禊位けいは膳ぜんをわくも正
位三秋さんしゅうの後のちより一秋いつしゅうくくへ

忌日きじつ凡たゞ附つ禰ね

時系とき四夜よの介け。禰ねと忌日きじつの二系にあり。禰ねハ毎
年九月しゅうごうより十月じゅうごうの介け。八月はつごう下旬しゅうごんより日ひととよりよりあひあひ前まへ三
日さんじつ前まへ戒けいして考かう妣ひ二系にと系けいハ毎まへ年ねん五ご存ぞん立たの介け
ハ考かう主しゅ一いつ存ぞん立たの介け。人の長ちやう子しよりよりされされハ系けいららず
とあり。忌日きじつハ正せい尚しやう月げつ忌きなり。前まへ一日いつじつ前まへ戒けいして系けい
脹はふして系けい候こう。自より余あのまつつハはりりあり

てハすすみみつつらら教けう師しゆゆ之之酒しゆ肉にくととららもも忌日きじつのまま
つつりりするする日ひハはももくく前まへ戒けいしてして至ち矣やととハはいいとと
ささ何なにやや聖せい賢けん之之終しゆう身しんの喪さうととのまままととハはいいとと
ははくくととハは一いつ。二系にととハは儀ぎ節せつハは時とき系けいハはあありり。ささもも
一いつ忌日きじつもも其その忌日きじつハはいいととららるる神かみ主しゅ一いつ位いししりり正
寢しんららううてて是このをこのままのままま福ふく酒しゆををののままとと脹はふををりりををささをを
墓かみ系けい十じゅう
三さん月げつ上じやう旬しゆんハはおおこころろああやや。前まへ一日いつじつ前まへ戒けいしてして墓かみとと掃はき
除はらいい。墓かみののああははききららひひりりけけとと物ものととをを
あありり。春はる神かみ降くだ神かみ三秋さんしゅう等とう大だいくくととあありりのの系けいハは同どう。

又墓のたよつてて祭を州ともいひしり成志を
 墓のあとむむく物候うまて土地の神
 を祭候なり。儀節又墓あよをわ
 ある人いよく墓の直よあれ其方のある所。四向
 くれ祭候なり。一年一度ありてやむい候そや。
 平いよく先儒の説を案する所。墓の體魄と
 かり。廟其神候候なり。かろくは廟なり
 といり聖人禮を制しあひて廟は專らあり
 あり。所もいひあり。一の墓祭あり。今家廟あり
 くらせらるるなり。墓はあり候

庶子十一

礼經は支子のまらふとあるも天下祭せ候と
 ぬへあり候のゆや。今もが 國の人をわたり祭
 候。一一家の内を人主儒禮はうらぶらうあり
 祭りよく思ふ人あらんよ。長みあらむとて祭
 ずい。川邊の世より祭礼におひつねん。そと一見
 ころ親の家を流せる兒は神ん。ころ祭人さる
 理を説さうせ。古礼よ心をよするやうにす。ぬ。
 一菜門して祭らんとあら。何のようら。こいり
 是よ志りん。我いあれが助とあら。け。ころ見たり

聖人の法は儼えんみきて。どくくは兼引ある故一と云
力あるにす。亦さるものこやく我家は神主を
あつめ。四河の糸おこす。すいあふく。と。是又を
よつふ。ゆる存よほく。さうとくす。ふや。ひくよと
あれ。親の存生の河。兄の御一あひ。うらさ。やと
に。我をもよりく。を。御一あり。と。いとんや。ぢり。又
兄才とてに。糸礼おこす。ふ。家ありて。も。兄あひ。旅あひ。さう
て。全才。四よ。あつめ。兄の家。あて。兄よ。か。より。て。糸
の。會一。その。河。を。兄の。自。身。中。ら。あ。つ。る。よ。り。を。輕かう
く。ま。ふ。會一。又。兄の。圖。よ。あり。て。亦。他。は。よ。は。旅あひ。さう。

年々の糸よあり。うらさ。ゆ。あ。つ。寸の。糸の。河。さ。う
と。に。旅あひ。宿。よ。位ち。と。ま。す。を。神。主の。号がう。を。より。り
後。よ。く。さ。つ。つ。けて。糸。礼。さ。の。と。く。よ。つ。と。め。糸。り
お。り。り。さ。う。は。う。の。紙。幡がう。を。火。よ。や。く。會一。

通禮十二

を。さ。う。う。人。一。生。の。内。一。日。は。關かん。へ。う。ら。さ。心。を。晨。謁ちん
を。り。晨。謁。は。毎。朝。子。天。よ。起きこ。て。ふ。ら。り。候あひ
ゆ。ひ。袴かほ。さ。う。ぬ。え。そ。ま。ら。祠。堂てう。へ。月。つ。り。戸。を。む
く。も。一。を。を。ひ。く。焼。香。再。振。す。云。云。を。り。さ。て。何
方。へ。を。り。さ。て。出。行。の。り。め。あ。れ。は。う。ら。さ。寸。祠。堂。へ。

ある人いづく曲禮きりていといく君みの礼をかこまへ
俗をきん変ぢんるし儀未めをき祭さいの礼き居喪きよさうの服きれ
其玉の故このこくすこうんこいこ 本朝中せり
あれく喪祭かやう定法あり今こをこそれと
くこてこ家禮こよこうこいこここは俗をこ變こてこ其國の故
のこくこせこふこなりこいこむこ予こいこくこをこ今これ
二礼こはこ是こ中こ右こ吳こ海このこ教こよこをこりこせこわこうこ 國
初神聖の送法こはこあこくこ次こ是こをこ 國の故こが
とたこもこふこいこくこのこ官こ人このこ子このこ民間こよこあこうこ
とこてこらこれてこ農こ業こをこここうこ家こ法ことこあこもこいこか

りこここいこ 本朝上右の礼文このこ神こいこんこごこつこすこ
ひこうこくこよこ考こへころこすこといこいこどこ其法こ今このこ俗こ禮こ
りこちこくこ似こてこ家こ礼こよこ遠こいこいこくこ信こぢこすこ。
其のこうこくこ曲こ禮このこはこ文こ他こ玉こよこうこつこすこいこんこりこの
本國このこあこうこつこをこまこくこよこ恐こひこふこあこるこ儀こいこすこ
必こしこもこそこのこ流こ俗こにこまこくこといこいこあこうこ次

二禮童覽下終

二
三
十
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

元禄元丙辰歲十一月吉日

姉小路堀河東江入町

中川茂兵衛板

土海屋上
野口

沖

